

施設の機能を地域にひろぎ 施設利用者への支援も向上

東京都／社会福祉法人多摩同胎会東京都調代ホームきずな施設長
（母子生活支援施設白鳥寮施設長）

近藤政晴

はじめに

母子生活支援施設は、児童福祉法第38条に基づく児童福祉施設だ。法人内の母子生活支援施設では、離婚、夫等の暴力、サラ金、育児不安、就労相談等の相談や支援を行っている。また、相談や支援を行ううえで必要に応じて夫婦間の調整や親族関係等の調整も実施している。

ここでは、母子生活支援施設白鳥寮と白鳥寮の機能を生かして行っている地域の子育て支援事業を紹介したい。

子ども家庭支援センターの開設

府中市は、人口約24万7000人（2008年6月現在）、都心から電車で約20〜30分ほどの場所にある、豊かな緑に囲まれた自治体である。白鳥寮は、老朽化した施設を改築するにあたり、新たに「地域の子育て支援」機能を担うために、「子ども家庭支援センター」の開設が検討された。その際、市内で24時間対応できる児童福祉施設が白鳥寮しかなかったこともあり、市からの積極的な支援を得て、1995年2月1日、府中市の委託事業として、子ども家庭支援センター「しらとり」（以下、しらとり）を開設した。子

ども家庭支援センターは、家庭での子育てを総合的に支援する地域の拠点施設で、東京都が単独事業として始めたものである。これは、1997年に創設された、児童福祉法第44条の2に規定される「児童家庭支援センター」の先駆けとなったものである。

現在も東京都の単独事業として続いているが、しらとりは、その初期の頃からモデル的な形で取り組んできている。

子ども家庭支援センターの事業

東京都では、住民が身近なところで、どのようなことでも気軽に相談でき、適切な援助やサービスが利用できる体制の

構築を目的に、子ども家庭支援事業を開始し、その設置促進を図ってきた。基本的な役割と特徴は、①すべての子どもと家庭を対象とする、②子どもと家庭に関するあらゆる相談に応じる、③子どもと家庭の問題に適切に対応する、④地域の子育て支援活動を推進する、⑤子どもと

家庭支援のネットワークをつくる、というものである。

しらとりでは、これらの基本的な役割を踏まえ、次の事業を実施している。

- ① 365日24時間の相談事業の実施、
 - ② 子ども家庭在宅サービス事業（トワイライトステイ事業・ショートステイ事業・母子・父子緊急一時保護事業）の実施、③ 相談機関等関係機関と連携した子ども家庭在宅サービス事業の調整、④ 孤立しない子育てを支援するための母親グループやボランティアの育成である。
- また、2002年度からは、白鳥寮の保育室を活用した病後児保育事業（府中市からの受託事業）を実施している。

しらとりの①〜④の事業は、当法人としての地域組織化事業と位置づけ、表1の通り展開してきた。

子ども家庭支援センターにおける地域に向けた親支援

(1) オープンルーム事業

オープンルーム事業は、「仲間がほしい」「育児のことがもっと知りたい」とい

ったニーズに対応して、1997年にスタートした仲間づくりを支援する事業だ。この事業の活動はしらとり2階の地域交流室（学童室・トワイライトステイ事業）で行われている。

2006年度には、28回開催し、延べ895組、1871名が参加した。この事業は、当初は施設内のみで実施していたが、現在は、より多くの方が参加できるように、市内の文化センターや公園も利用して、出前オープンルーム、背空オープンルームとしても実施している。また、この事業には、民生委員をはじめ元オープンルーム参加者、近隣の方など多くの方がボランティアとして参加し、延べ168名の方の協力があった。特に、市の民生委員協議会には民生委員全員が参加する前提で年間のスケジュールを立て、1回の開催で最低4名以上の民生委員が活動できるように配慮していた。

オープンルームへの参加者は、リビーターが多いが、2006年度は、民生委員、関係機関からの紹介や口コミなどに

表1 子ども家庭支援センターしらとりにおける年度別利用状況

	オープンルーム利用状況		トワイライトステイ	ショートステイ	緊急一時保護
	回数	ボランティア参加人数	延べ人員	延べ人員	延べ人員
平成8年度			1,466	648	489
平成9年度	18	80	1,075	2,336	451
平成10年度	21	251	1,237	3,094	287
平成11年度	21	167	1,224	2,521	222
平成12年度	22	184	1,561	3,613	114
平成13年度	22	309	2,245	3,007	83
平成14年度	22	190	2,031	4,058	185
平成15年度	23	189	1,903	5,904	145
平成16年度	24	186	1,953	6,361	140
平成17年度	25	158	2,067	6,137	144
平成18年度	28	168	1,871	5,794	126

表2 2007年度ミニマザーズグループ年間プログラム内容

日/月 参加人数	テーマと内容
第1回 5/28 母親5名 子ども5名	知り合おう・リラクセスしよう リラクセスについて インクビーターカードによる他紹介 呼吸法、全身のリラクセス・プラスメッセージ
第2回 6/17 母親5名 子ども6名	心にゆとりを！ 創作によるペアリラクセス (上肢作り、顔作り) 心の空間作り
第3回 7/15 母親4名 子ども5名	楽しく話そう 子育てについて話し合い (自己主張・異議あり・こんな子になってほしい) セルフタッピング
第4回 8/9 母親5名 子ども6名	感情のコントロール 数々の感情の取り扱い方、 ストレスへの反応について、 セルフタッピング
第5回 10/21 母親4名 子ども5名	からだと心のリラクセス 肩のストレッチ、呼吸法、顔上リリラクセス、 ほめるワーク、全身のリラクセス・プラスメッセージ、 話し合い(うめしたいこと)
第6回 11/25 母親5名 子ども6名	分かち合おう リラクセスの楽しみ、心の天気、 5色タペスト、 希望していくメンバーから、パートを譲ろう
第7回 1/13 母親5名 子ども6名	スッキリとゆるもう 呼吸法、肩こりワーク、足裏一定全体のほくし、 ゆめながら心の整理 (胸に気がかりを届けてみる)
第8回 2/24 母親3名 子ども4名	ゆるめて、イメージで、リラクセス ジャンケン(両手)、リラクセス呼吸法、 人の顔、想像操作(イメージリラクセス)、 聴く瞑想
第9回 3/17 母親4名 子ども6名	まとめ・親子で楽しもう 親子ワーク作り、 まとめ・振り返り

＜担当スタッフ＞
全体職員 母子関係員1名 養育指導員1名
グループワーク 臨床心理士2名

より、172組の親子が初参加した。ここでは、母親同士の交流と子どもが関心をもてる誰もが自由に参加しやすいプログラムを用意した。

(2)「NOBODY'S PERFECT」

また、子育てに不安を感じている母親を対象として、カナダ生まれの子育て親支援事業プログラム「ノーバディーズ・パーフェクト」(NOBODY'S PERFECT/NP)を2004年度から取り入れている。日本語で訳すと「完璧な親なんていない」というこの取り組みは、どちらかといえば、一人で育児に悩んでしまう母親を対象に保育つきで行うもので、子育ての正解を提示するのではなく、親が自分らしい子育てができるよう支援するプログラムだ。小グループで、1クール8回を1年間3クールで実施している。

NPは、一定の研修を受け、認定されたファシリテーターが進行する参加者中心のプログラムで、グループのルールづくりや取り上げるテーマの選択を参加者の話し合いにより決定し、進める。同プ

ログラムに参加して、子育ての悩みや関心を分かち合うなかで、「悩んでいるのは、自分だけではないと思え、子育てが楽になった」など、参加者からは高い評価を得ている。ここで出会った子育ての仲間とは、プログラム終了後も、地域交流室等を利用して、自主的な集まりが継続して行われている。

母子生活支援施設利用者への親支援

白鳥寮では、古くからカウンセリングルームを整備し、臨床心理士を配置し、母と子の個別カウンセリング等の心理療法を行ってきたが、そのなかでも、NPは注目された。そこで、NPを基盤とした少人数制の母親グループ活動を企画し、「ミニマザーズグループ」と名づけて、試行した。

実際、母子生活支援施設を利用する母親の、病理(離婚による傷つき、精神疾患・環境(母子家庭・原家族との疎遠)などに起因する養育の困難さは、従来から行ってきた限られた時間で、臨床心

当スタッフによる、年間を通じた参加母子の変化という点からの評価も行った。結果、参加者の評価は高く、プログラムの全体に対して肯定的な感想や母親自身の認知の改善、心的機能の向上(自尊感情の向上、他者との関係のもち方の改善、自分らしい子育てへの自信、養育態度と母子関係の改善についての自覚や気づきといった変化について多く語られた。また、スタッフからも、プログラムのなかで母子関係の変容(母子間の緊密性、自然な愛情表現の増加)がみられたことなどがあげられた。

今後も改善の余地はあると思うが、母子生活支援施設の利用者にとって、効果あるプログラムであると思っている。

おわりに

しらとりにおける地域の親支援を運営していく基礎となったのは、母子生活支援施設として蓄積された母子への支援であった。母子生活支援施設の利用者数は多くはないが、0歳から18歳までの児童とその母親が入所しているため、課題やその解決のための支援の方法は、社会的に必要とされる親支援にも十分活用できるものがあるといえる。

白鳥寮では、母子生活支援施設に子ども家庭支援センターという地域に開かれた機能を有したことで、職員が増え、さまざまな事業の取り組みを通して、それらが母子生活支援施設利用者への新しい支援をつくり出すことになった。

これからも、母子生活支援施設の利用者支援とセンター機能の相乗効果を築きながら、施設の利用者はもちろん、地域の親子の支援を展開していきたい。

臨床心理の分野では、「心理教育的グループ」という、臨床心理士などの専門家を中心とした取り組みがある。白鳥寮で行う「心理教育的母親グループ」は、子育てにおいて問題やリスクをもつ母親に対して、役立つ知識や情報を伝え、問題への対処法を習得するワークの実践と、安心して自分や子どもとの問題を語る場

心理教育的母親グループ

臨床心理の分野では、「心理教育的グループ」という、臨床心理士などの専門家を中心とした取り組みがある。白鳥寮で行う「心理教育的母親グループ」は、子育てにおいて問題やリスクをもつ母親に対して、役立つ知識や情報を伝え、問題への対処法を習得するワークの実践と、安心して自分や子どもとの問題を語る場